

令和元年6月13日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04221

研究課題名(和文)ヘーゲル哲学からみたデューイ教育思想の再評価とその可能性に関する研究

研究課題名(英文)Reevaluation of Dewey's Educational Thought and its Possibilities in terms of Hegelian Thought

研究代表者

松下 晴彦(Haruhiko, Matsushita)

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：10199789

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、デューイ思想形成へのヘーゲルの影響について再評価し、デューイ思想の枠組みの展開-特に主要概念、成長、民主主義、経験の連続と再構築、社会的探究など-を、ヘーゲル哲学の観点から再考することにより、曖昧で難解、実践的でないとされてきたデューイ教育思想のより説得的な理解の枠組みを提示することを目的とした。先行研究としてShook, Goodらの研究があるが、本研究ではこれらを踏まえつつも、かれの自然主義的経験論の淵源が、1880年代の『論理学』や『精神現象学』の読解にあると捉え、ミシガン、シカゴ大学時代の講義ノートや1896年論文「反射弧概念」他にその痕跡が認められることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

デューイ思想の形成は、観念論期、実験主義期、自然主義期に区分して捉えられ、観念論期(ヘーゲル期)は後に離脱したと捉えられる。この理解に対し、本研究では、デューイの教育学説には、心理学的機能主義、道具主義的な理解へと展開された後も、ヘーゲル的、弁証法的な考え方、理論的な枠組みの残滓がみられることを明らかにした。例えば、かれに特有な方法と題材を分離しない教材概念も、その背後にヘーゲル的な思考法(題材は分解されて、事実的な要素と観念的な要素となり、展開されて方法となる)を看取することができる。こうして、一見難解なデューイ教育学説のより受容可能な理解の方法を提示できるのではないかと考えられる。

研究成果の概要(英文)：I explored a Hegelian continuity in Dewey's ideas. (1)I examined Dewey's essays which showed explicitly Hegel's enduring effects. (2)I explored Dewey's conception regarding the role of universals and particulars and others described in his early works. My analysis shows how Dewey reconstructed Hegel's concepts in terms of the trasastional terms as explained in his middle works. (3)I proposed a way of rereading Dewey's idea in Hegelian as well as in evolutionary and naturalistic terms.

研究分野：教育学

キーワード：デューイ ヘーゲル 教育思想 プラグマティズム アメリカ教育 哲学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) デューイ教育思想とその教育学説に関する研究は、国内外において、過去一世紀以上の歴史がある。そのうち、デューイの思想形成に焦点化した研究においては、これまで、デューイのミシガン大学時代にほぼ相当する観念論期、次にシカゴ大学時代からコロンビア大学時代初期の実験主義・道具主義期、最後にコロンビア大学時代後期より晩年までの自然主義期の三期に分けて論じるのが一般的であった。その場合、本研究課題に関係するデューイの教育学説については、初期のヘーゲル的な絶対主義期から徐々に脱却し、シカゴ実験学校での実践を背景に、心理学的機能主義、プラグマティズムの結実として、実験主義期に形成されたと捉えるのが一般的である。こうした一般的な理解に対して、20世紀末より、アメリカを中心に、デューイの自伝に述べられているようなヘーゲル主義からの脱却を否定するものではないものの、デューイ哲学には、実験主義以降も、また晩年の自然主義期であっても、ダーウィニズムとともにヘーゲル的な要素の残滓をみることができるといふ学説が唱えられた。その主な論者は、J.R.シュック、T.C.ダルトン、J.A.グッド、J.ガリソンらである。もちろん、かれらの間で取りあげられた主題は多様であり、統一見解があるわけではないが、それぞれにヘーゲル的な痕跡をデューイの論理展開と問題の立て方に見ている点で一致している。本研究課題は、かれらの着想に学びながらも、対象をデューイの初期論理学や倫理学とその後の展開に向け、そこに、ヘーゲルの『論理学』や『精神現象学』における批判と同種のものを探っていこうというものであった。

(2) デューイ思想のなかにヘーゲル的な残滓を見出そうという上記のタイプの研究の根拠となっているのが、近年編集され始めた、ミシガン大学、シカゴ大学、コロンビア大学、その他の大学で開講されたデューイによる講義、演習などのベースとなった講義のノートであり、また受講生による記録である。デューイは時々今日の TA、GA に相当する学生に速記録をさせていたことが知られているが、他にも受講生が速記録を雇用していたことも知られている。特に、ミシガン大学時代にもシカゴ大学時代にも、同じタイトルと内容のヘーゲルについての演習が開講されていたことがわかっており、このことは、デューイの思想の変遷が起こったといわれている時期に、デューイ自身は引き続きヘーゲル哲学に強く持続的な関心を寄せていたことを示すものである。本研究では、この事実を重視し慎重に見極め、デューイが伝統的な哲学を批判し、また現代的な諸問題を精査、分析し、新たな問題の立て方を提言するときの基盤に、ヘーゲル的な批判の姿勢、特に社会や人間の諸問題を弁証法的に捉え直していく姿勢があるのではないか、その場合のヘーゲル的な残滓を、デューイの諸論文の中に探り当てていこうというものであった。

(3) デューイのミシガン大学時代を中心とする初期デューイ思想に関する研究として、アメリカでは、M.ホワイトの『デューイの道具主義の起源』(1943年)、R.B.ウェストブルックの『ジョン・デューイとアメリカ民主主義』(1991年)、R.バーンスタインの『ジョン・デューイ』(1996年)などが知られ、日本では、栗田修『デューイ教育学の起源』(1979年)、森田尚人『デューイ教育思想の形成』(1986年)などがあり、それぞれデューイ思想の淵源を、ハックスリーの生物学的進化論、スコットランド学派との対決、T.H.グリーンらのイングランドの観念論からの影響などを論点として分析している。しかしながら、これらの先行研究においては、上記のデューイの講義ノートを基盤とした思想形成の分析、またヘーゲルの原典からデューイが何を学んでいたのかという点について実証的な考察が欠けていた。本研究はこれらの空白を埋めるところに位置づく。

2. 研究の目的

上記の先行研究に対し、本研究課題では、デューイの講義ノート資料と近年のデューイ研究の動向を踏まえ、実験主義期、および自然主義期におけるデューイ教育思想の形成にヘーゲル哲学、並びにネオヘーゲル主義がどのように影響し、またそれらの痕跡を残しているかを探究することを目的とした。より具体的には、シカゴ大学時代に練り上げられていった教育目的の成長概念、有機体と環境との相互作用概念など、デューイ思想における主要概念が、どのような淵源をもつのか、デューイの着想の背後にどのような哲学的思索と伝統哲学の吟味があったのか、これらをミシガン大学時代とシカゴ大学時代の講義と演習のためのノートの分析から明らかにしようというものである。さらに、このような作業により、『民主主義と教育』『子どもとカリキュラム』『経験と教育』などの主要著書において展開されたデューイの鍵概念の生成と意義をより深く理解するための方法を提示することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究課題の遂行にあたり、次のような視点と問いを立てた。(1) 初期デューイに影響のあったヘーゲル主義とはどのようなものか。(2) デューイ自身はそれをどのように受容し、超克しようとしたのか。(3) 先行研究において定説となっているヘーゲルからの離脱とはどのような意味においてか。(4) 「離脱」後も、ヘーゲル哲学の痕跡をみることができるといふ諸点である。

(1) については、19世紀のアメリカにおけるドイツ観念論の受容の潮流、特に W.T.ハリスと H.C.ブロッケンマイヤーによる『論理学』の翻訳をはじめとするヘーゲル哲学の精力的な紹介、1867年創刊の『思弁哲学雑誌』の編纂などいわゆるセントルイス学派の哲学運動を

中心に分析を行った。また先行研究ではよく知られているところであるが、あらためて英国の T.H.グリーン、F.H.ブラッドリー、B.ボザンケットなどの新ヘーゲル主義、観念論の潮流についても考察した。(2)については、デューイの講義ノートおよび受講生による速記録を精査することにより、ミシガン・シカゴ大学時代のデューイの思索のプロセスを再現することを試みた。この時期は、後のデューイの教育学説の主要概念である相互作用、成長、経験の連続性と再構築などが構想される時期であり、普遍・客観や自我、精神(合理的に再構成された宇宙の実現)などのヘーゲル的な語彙がいかに行為や状況といった相関的な語彙に置き換えられていったのかを辿ることが研究課題の中心であった。(3)と(4)については、講義ノートの編纂資料を前提とした近年のデューイ研究をレビューし、ヘーゲルからの離脱とされる1903年以降のデューイ論文をどのように再解釈しているのかを分析し、それらを受けて本研究では、特にヘーゲルの『大論理学』における「概念」や「判断形成」と、デューイの有機的な論理学概念(ほとんど探究概念に近い)との酷似性、ヘーゲルの弁証法とデューイの論理学における普遍・特殊・個別命題の峻別とそれらの間の相互作用的な把握の仕方の比較、またその他の習慣、自我形成など自然主義的な概念の捉え方に対するヘーゲルの影響の有無を考察した。

4. 研究成果

(1)本研究課題の中心に史資料としてのデューイ講義ノートがあるが、最もよく整理され信頼できる注釈も施されているのが、J.S.シュックとJ.A.グッドによる「1897年のヘーゲル講義」の記録である。本研究では、シカゴ大学時代に開講され(しかもほぼ同じ内容で繰り返されていた)ヘーゲルの『精神現象学』をテキストとした講義内容を精査することにより、デューイがネオヘーゲル主義やイギリス観念論を経由することなく、ヘーゲルの原典から哲学的着想を得ていた経緯を辿ることができた。従って、従来のデューイ思想の形成に関する定説である、シカゴ大学時代のどこかでヘーゲル主義から実験主義への移行が準備され、1903年にはヘーゲルからの決別があったという捉え方に対しては、より慎重な判断を下すべきであることが判明した。

他方、1903年以降のデューイ哲学の変遷において、そこに依然ヘーゲル哲学の痕跡をみることができるかどうかという再評価の問題については慎重な姿勢を要する。デューイの関心は社会哲学、政治哲学へと向けられ始め、そこではヘーゲル的な絶対精神、普遍的な自我実現の観点は明確に否定されている。本研究が着目したのは、デューイ哲学の総決算となる晩年の『論理学』において結実している社会的探究の枠組みであり、特にそこでの論理思想に引き続きヘーゲルの判断形成、概念の生成のアイデアが底流にあるのではないかという解釈である。

(2)デューイの論理思想は、認識の方法としての形式的な思考法則のみを扱う伝統的な論理学、特に形式的論理学とは対照的な特徴をもっている(ここには、近代の認識論批判の特徴である反基礎づけ主義、外部からの基礎づけの文脈の排除と、逆に特定の問題を捉えるときの徹底した文脈化・内在化という姿勢、認識のための概念的枠組みを外部に認めないという姿勢が窺える)。第一に、その発生論的で全体論的な論理観であり、知的活動もまた、生物学的な環境への適応からの連続と質的段階の発展、統合として把握される。つまり、論理的思考の起源と発展も発生論的に捉えられる。第二に、形式論理学では、探究の外部において、論理形式の妥当性が前提とされ実体化されたりもするが、デューイにおいては、論理形式は、探究の内部に起源を持ち、その有効性が確認された内容の形式であり、探究の方向づけや制御をするための一般化された操作である。このことは、デューイが「判断」と「命題」を概念上区別し、社会的探究の帰結である「判断」については、その「真偽」(保障された言明可能性)を問う一方で、「命題」については(本来的に真偽値をもつものではなく)妥当性、非妥当性という包括的な基準を適用し、探究における現実存在の(existential)要因を操作的に構成するものとして捉えるという点にあらわれている。「判断」は、「先行する現実存在的な不確定状況の、確定的な状況への変換」であり、特殊や単一とは区別され、個別的であるといわれる。つまり、判断は、ほぼ探究概念に近い。このようなデューイ論理学の着想、その特異性の起源は、明らかにヘーゲル哲学(弁証法、概念形成)からの影響であり、結論として、デューイ論理学の特異性は、ヘーゲル哲学の絶対的観念論、形而上学的な諸前提をそぎ落としたところにあり、デューイ哲学は、自然化されたヘーゲル主義的な論理学説と捉えるときにもっともよく理解できると考えられる。

(3)デューイの教育学説の再評価の可能性について、従来のデューイ教育学の解釈では、その主要著作『学校と社会』『子どもとカリキュラム』『民主主義と教育』『経験と教育』などにおける子どもの興味、衝動の重視、問題解決能力の育成、反省的思考のプロセスの解明など、デューイの思索の帰結を教育方法に活かすべく適用されるという順序で理解されてきた。しかし、本研究においては、帰結としてのデューイ教育学ではなく、実験主義の枠組みに、ヘーゲル的な有機的な全体論的な解釈の軸を加えることにより、有機体としての学習者の存在、外部を認めない社会的探究、経験の連続性と再構築のプロセスなど、より根源的、生成的、包括的な理解の枠組みが可能となると捉えている。デューイの主要な語彙、説明概念については、日常言語が用いられているにもかかわらず、曖昧で難解だと批判されてきた。例えば、通常、対象を研究して内容を得る(知識を得る)と考えるが、デューイにおいては、内容を操作して対象を得ると捉えられる。かれにとっての探究の対象は、結果としてあるものであって、探究の操作とは別にあらかじめ設定されているものではないからである。これは、思考操作の前に存在する知識対象を否定していたヘーゲルの考え方を継承したものと再解釈すると、理解は容易になる。

デューイの教育学説をヘーゲル的な語彙から再読していくことの可能性が示唆されたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8件)

松下晴彦「20世紀初頭のアメリカにおける研究促進体制の形成とその役割」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)第65巻第1号、2018年)13-23頁、査読無し。

松下晴彦、生澤繁樹「プラグマティズムは『教育』をどう問い直してきたか? -現代プラグマティズムが切り拓く問いの地平を踏まえながら-」(教育哲学研究、第115号、2017年)133-139頁、査読有り。

松下晴彦「進歩主義の時代のユニヴァーシティとカレッジ」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)第64巻第1号、2017年)21-31頁、査読無し。

松下晴彦「初期デューイ論理想とヘーゲル」(日本デューイ学会紀要、第58号、2017年)57-66頁、査読有り。

松下晴彦「ジョン・デューイの哲学的方法とヘーゲルの痕跡」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)第63巻第1号、2016年)1-11頁、査読無し。

松下晴彦「現代アメリカ教育思潮の変遷と展望 政治哲学・文化政治学・教育政策からみるアメリカ教育の動向」(アメリカ教育学会紀要、第26号、2015年)65-66頁、査読無し。

松下晴彦「グローバル化と新自由主義統治の時代における批判的教育学の可能性(1)」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)第62巻第1号、2015年)19-29頁、査読無し。

松下晴彦「1903年から1915年のデューイによるヘーゲル解釈とその批判」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)第61巻第2号、2015年)43-51頁、査読無し。

〔学会発表〕(計 5件)

松下晴彦「20世紀初頭のアメリカにおける研究促進体制の成立と社会科学の位置」(アメリカ教育学会第30回大会、東洋学園大学、2018年10月)

松下晴彦「ブラックマンテン・カレッジの挑戦とデューイのリベラルアーツ論」(アメリカ教育学会第29回大会、愛知教育大学、2017年10月)

松下晴彦「初期デューイ論理想とヘーゲル」(日本デューイ学会研究大会、岐阜大学、2016年9月)

松下晴彦「プラグマティズムは『教育』をどう問い直してきたか? -現代プラグマティズムが切り拓く問いの地平を踏まえながら-」(教育哲学会大会、東京大学、2016年10月)

松下晴彦「ポスト・ワシントン・コンセンサスの時代における超国家的アクターの位置-批判的教育学からの考察-」(アメリカ教育学会第27回大会、武庫川女子大学、2015年10月)

〔図書〕(計 2件)

松下晴彦、加賀裕郎、新茂之、早川操、小柳正司他『プラグマティズムを学ぶ人のために』(世界思想社、2017年)

松下晴彦、早川操、伊藤彰浩、西野節男、服部美奈、阿曾沼明裕他『教育と学びの原理-変動する社会と向き合うために-』(名古屋大学出版会、2015年)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。